

モダリティ表現と間主観性

——フランス語の副詞 *peut-être* を事例に——

岸 本 聖 子

1. はじめに

たとえばフランス語の法助動詞 *pouvoir* は、伝統的な意味分類としては「可能」や「許可」に代表される根源的用法と、「蓋然性」を表す認識的用法とがある。しかし、次のような例に見られるように〈是認〉のような認め方の意味効果が生じることもある。それはまた、副詞 *peut-être* についても同様である。

(1) [遠距離恋愛のコミュニティーサイトのキャッチフレーズ]

La distance *peut* éloigner deux corps mais pas deux cœurs

≈ La distance éloigne *peut-être* deux corps mais pas deux cœurs

距離は二人の体を引き離すかもしれないが、二人の心は引き離さない

(岸本 2015)

岸本 (2015, 2018 [2016], 2017) では、上記のようなタイプを間主観性との関連で、(a) 陳述性にかかわる語用論的意味効果の問題であること、(b) 間主観性の認知基盤となりうる共同注意の観点から議論可能であることを論じてきた。しかし、その課題として、どのような点において間主観的であるかということについて十分な検討ができなかった。本稿では、間主観性の概念について再確認するとともに、モダリティ副詞 *peut-être* を事例として間主観性が対人配慮機能と密接に関わっていることを論じる。

以下ではまず、間主観性とは何かを確認し (2 節)、フランス語のモダリティ副詞 *peut-être* を事例として、間主観性の延長線上に捉えられる対人配慮

機能を仮定する（3節）。最後に、副詞 *peut-être* の一部の表現が間主観性という性質に集約できるとしても、その内実は多様であることを示す（4節）。

2. 間主観性の定義

2.1. 発話現場指向の間主観性と事態把握指向の間主観性

言語の主観性が言語学において注目すべき重要課題となりその議論が盛んになって久しいが、それに伴って間主観性という概念についてもしばしば言及される。しかし、この間主観性については主観性に比して研究者間で認識が一致しているとは言い難く、またその分析可能性についてはまさに現在進行形であり、種々の事例が蓄積されているところである。間主観性についての主要な概念は次のようなものである。

主観性についての萌芽的研究が Bréal (1964 [1900]) であるとすれば、間主観性のそれは Benveniste (1966) に認められる (Traugott 2010; 進藤 2020)。

- (2) Bien des notions en linguistique, peut-être même en psychologie, apparaîtront sous un jour différent si on les rétablit dans le cadre du discours, qui est la langue en tant qu'assumée par l'homme qui parle, et dans la condition d'*intersubjectivité*, qui seule rend possible la communication linguistique. (Benveniste 1966)

言語学における多くの概念が、おそらく心理学においても同様であろうが、もしそれらを話の枠組の中に入れなおしてみるならば、異なった光のもとに現れてくるであろう。話というものは、話している人間がそれを引き受けるかぎりにおいて、かつそれのみが言語による交信を可能ならしめているところの、間主体性 *intersubjectivité* という条件のもとにおいて、言語なのである。(訳：岸本他 1983)

ここで「話」とは *discours* のことを指している。Benveniste は、発話の場という枠組みにおいて言語が対話の参与者間の相互認識を負っていることを述べているが¹⁾、このことはさらに「*intersubjectivity* とは、コミュニケーションへの個々の参与者が話をしている主体であり、同時にこの本人が他の参与者も話を

している主体であると気づいていることである」と解釈できるという（進藤 2020）。

その後、間主観性という概念が脚光を浴びるのは Traugott の80年代以降の一連の研究においてである。彼女は以来、主観性（化）と間主観性（化）について考察を重ねるが、Traugott の間主観性は、当該表現の使用場面における語用論的推論が意味拡張の基盤となり、その対話場面における意味拡張の一部が昇華されたものとして提出された概念である。特に、聞き手の存在をより強く意識している点が特徴的である。コミュニケーションの場を基盤として展開している点では Benveniste の流れを汲むと言えよう。

Verhagen (2005) もまた間主観性について議論する場合には重要視される文献であるが、こちらは Langacker の主体化プロセスに影響を受け、それを修正する形で提示されたものである。Langacker が主体化の説明で、‘The relationship between a speaker (or hearer) and a situation that he conceptualizes and portrays, involving focal adjustments and imagery’ (Langacker 1987) と定義しているものからは、基本的に話し手や聞き手などの個体を巻き込み、また一方で当該の状況をも取り込むことが読み取れるが、Langacker の図式は言うなれば事態の把握にかかわる問題である（後述）。ここで Verhagen は発話参加者 (participants) が複数であることに注目し、概念化者は Langacker の図式のように単体で捉えられるものではなく複数項が必要となることに着目している。また、しかしながら、Langacker や Verhagen の間主観性とは人間の認知能力に動機づけられた事態把握の説明の一環としてなされている性格が強く、Traugott のそれとは異種のものであると言える。Traugott と Langacker の (inter)subjectivity の定義については以降で詳述する。

その他の間主観性議論としては、Tomasello (2003) があり、言語習得の立場から「言語記号は他者から模倣的に学習されるので、記号使用者が対話者も慣習を共有しているとわかっているという意味で、使用者によって「間主観的」に理解される（つまり、誰も潜在的に記号の産出者であるとともに解釈者であり、私たちは皆このことを心得ている）」（訳：辻他 2008）とする。外界の事物に対する注意を対話の参与者間で共有することにその動機づけを求めて

いるのだが、コミュニケーションの場における話し手と聞き手との関係構築上の特性として記述されていると解釈できる。

以上のように俯瞰すると、間主観性の定義が大きく発話現場指向なものと事態把握指向なものに区別できることが分かる。以下では、近年の定義的標石となっている Langacker と Traugott の概念について確認する。

2.2. Subjectivity : 主体性 vs 主観性

間主観性について語る場合、subjectivity という概念についても簡単に整理しておく必要がある。subjectivity という用語は、Langacker と Traugott に用いられて以来、各々の提示した定義が主観性をめぐる議論の足がかりとなっている。両者とも同じ用語を用いているが、その内実は実は非常に異なるものであり、近年の日本語文献では前者による定義を「主体性」、後者による定義を「主観性」として訳し分けることが多い。

2.2.1. Langacker の subjectivity

Langacker (1991) の subjectivity (主体性) は、端的に言えば、主体と客体の認識論と言える。認知言語学の枠組みにおいて主要なテーマの一つに事態の言語化に関わる認知プロセスがある。この部分はすなわち、人はいかに世界を切り取り、言表したいものを選択し、またどのように述べるのかということに関わるのだが、池上 (2020) に従ってその扱いを概観すると、認知言語学以前には伝統的には生得的なもの、あるいは言語そのものによって規定されるもの (Whorf) とされた。その後、Saussure によって *langage* が *langue* と *parole* という二つのレベルに分けられたとき、*langue*こそが言語学の対象であるというテーゼにしたがって *parole* に付随する言語化にまつわる部分は捨象され、その後の構造主義を経て生成文法に至るまで、議論の中心に上ることはなかった。しかし、事態の言語化、すなわち文の産出プロセスに認知言語学が取り組んだとき、それは Langacker により事態把握 (construal) として論じられ、池上の言葉を借りれば〈主客合一〉的な把握と〈主客対立〉的な把握に二分される。Langacker による以下の例によって確認しておきたい。

- (3) a. Vanessa is sitting across the table from Veronica.
 b. Vanessa is sitting across the table from me.
 c. Vanessa is sitting across the table.

(3a) の場合、話者（主体）は事態（客体）を外から眺めている状態である（〈主客対立〉）。(3b) はやや複雑な認識構造をしている。(3a) と同じく事態を外から眺めていると捉えることができ〈主客対立〉ではあるが、そこに客体化されているのは自己である。話者目線で場面を考えた場合、本来その場面にいる客体としての自己は見えないはずだから言語化されなくてもいいのだが、見る側の自己と客体化された自己があることになる（〈自己分裂〉 self split: Haiman 1989）。(3c) も実は同じ構図を取っていると言えるのだが、(3b) との違いは、自己分裂を起こして客体化可能な自己をあえて言語化しない点である（〈自己のゼロ化〉：池上）。このような文を産出するのは感嘆文や何らかの驚きや気づきがある場合が多く（池上 2020；中村 2019）、自らを事態の当事者あるいは体験者として状況の中に埋没させておいたままにする。これを池上の用語では〈主客合一〉と呼んでいる。自己の状況埋没型はすなわち自己を客体化しないという点で主体的な捉え方である。客体的な解釈から主体的な解釈への推移を Langacker は主体化としている（Langacker 1999；進藤 2020）。

こういった事態の捉え方は言語によりどちらが優勢かというある程度の傾向があり、最終的には言語類型論に発展しうる。例えば、中村（2019）の D モード／I モードといった概念も Langacker の上記のような世界の捉え方に基づくものであるが、どちらのモードが言語によって優勢であるかについても明らかにされていることである。さらに、このような規定において間主観性は〈主客合一〉的な捉え方に基づき I モードの一部として記述される。

2.2.2. Traugott の subjectivity

Langacker の subjectivity が文の産出に深く関わるとすれば、Traugott のそれは言表事態の解釈に関わるものである（中村 2019）。ある表現について、解釈主体によって読み取られた含意が解釈として定着すれば、その定着した含意が

その次の意味拡張の基盤を提供することになり、その表現は新たな意味を得たことになる。Traugott の subjectivity とはこの解釈主体による語用論的推論のことであり、Langacker の定義と比較した場合、〈事態の言語化〉と〈言表内容の解釈〉というまったく別方向のベクトルのものである。さらに、Traugott の定義は意味拡張とその方向性に重きをおくものであり、以下のような図式が知られている。

(4) non-/less subjective—subjective—intersubjective (Traugott 2010)

では、ここでの語用論的推論とは具体的には何を指すのか。Traugott による意味変化のプロセスは次のように仮定される。

(5) Semantic-Pragmatic Tendency I: Meanings based in the external world described situation > meanings based in the internal (evaluative/perceptual/cognitive) described situation.

Semantic-Pragmatic Tendency II: Meanings based in the external or internal situation > meanings based in the textual situation

Semantic-Pragmatic Tendency III: Meanings tend to become increasingly situated in the speaker's subjective belief-state/attitude toward the situation.

(Traugott & König 1991 : 208–209)

I は II の、II は III の意味拡張の基盤となることを前提に、I と II は主にメタファー的な推論にかかわる。I は外部世界から内部世界への、つまり物理的世界から心的世界への意味拡張と捉えられる。II についてはそれらがさらにテキスト領域に持ち込まれ、テキスト連結的な機能への拡張と捉えられる。しかし、III は話し手の主観的な信念や態度などのより内面的な世界の表出にかかわる。ここで関与するのはメトニミー的な推論であり、言語的な文脈と語用論的な文脈とを取り結ぶものとされている。

Traugott は、上記のような意味変化の段階のうち、III のタイプの拡張にまで

到達した言語表現の一部はさらに間主観的な意味拡張に至ると主張する。ここでの間主観性とは次のような側面を含む²⁾。

- (6) [...] intersubjectivity in my view refers to the way in which natural languages, in their structure and their normal manner of operation, provide for the locutionary agent's expression of his or her awareness of the addressee's attitudes and beliefs, most especially their "face" or "self-image" (Traugott 2003)

「自然言語が、その構造と通常の働き方の中に言語行為者による聞き手の態度・信念、とりわけ、聞き手の面子（体面）もしくは自己イメージの表出に備えているさま」（訳：澤田 2011）

彼女の間主観性の定義については、聞き手志向である、聞き手の存在重視であると捉えられがちだが、この定義の後半部分によると、それは単にコミュニケーションにおける話し手と聞き手の対峙や結びというだけではなく、「フェイス」という聞き手の体面に関わる概念にまで踏み込んでいる。このことは、具体的には次のような *actually* という語の意味変化によって例示される。

- (7) a. No. I don't think I was. No, I was determined to get married *actually*.
b. *Actually*, I will drive you to the dentist.

(Traugott 2003; Traugott & Dasher 2002)

(7a) の *actually* は聞き手に想定外のことを打ち明けるといった機能を含み、話し手と聞き手の関係性を親密にさせる効果があるが、(7b) ではさらに踏み込んで、「(あなたは自分で歯医者に行こうと思っていたかもしれないが) 実はわたしが連れていこうと思ってるんですよ」と、聞き手が断るかもしれないことへの話し手の配慮を表しているとされる（早瀬 2018）。

Traugott の考える間主観性は、しかし、主に意味変化を遂げたものが対象であり、単に語用論的な含意として解釈されるものとは区別している（Traugott 2010）。とは言え、対人配慮（あるいはポライトネス）的な側面を含む概念で

あることも事実であり、以下のような日本語の例においてその分析可能性が示されている。

- (8) a. 主観化：(室町時代)「御座(名詞)＋ある(動詞)」>(16世紀)「ござる」
b. 間主観化：「ござる」>「ございます」 (早瀬 2018)

「高い位の人が存在する」の意味が敬語「ござる」として確立し、さらに「ございます」として聞き手を高める表現、つまり聞き手への配慮を表す間主観的表現へと変化した例である(早瀬 2018)。

3. 対人配慮的な間主観性とモダリティ表現

3.1. 間主観性と対人配慮の意味

深田・仲本(2008)は、もともと間主観的な意味内容を持つ英語の *let* について、Wierzbicka(2006)を援用しながら次のように分析している。

- (9) a. *Let us go, will you?*
b. *Let's go, shall we?*
c. *Let's take our pills now, Johnny.* (深田・仲本 2008)

(9a)は自分たちの行為を聞き手に受け入れてもらおうとする話し手の思い(「～させてね」)を表すが、“..., will you?”があることから、単なる命令よりも聞き手への配慮が示されているという。(9b)は聞き手と結託して何らかの行為を行おうとする話し手の思い(「一緒に～しよう」)を、(9c)は聞き手に対する話し手のなだめすかしや行為の促し(「さあさあ～しましょうね」)をそれぞれ表す。(9a)から(9c)にかけて間主観性が増すが、(9c)は、*let's*(=*let us*)という表現を採りながらも実際に行為を実行するのは聞き手のみであるので、最も間主観的であると主張している。Wierzbicka(2006)は*let*の示す「我慢」、「情報の共有」、「積極的な仕事の申し出」、「共同行為の提案」、「協力的対話」、「協同行為」、「協同思考」といった間主観的意味は、近代(アメリカ)社会における民

主義と個人主義の成立の産物であると結論づけている（深田・仲本 2008）。

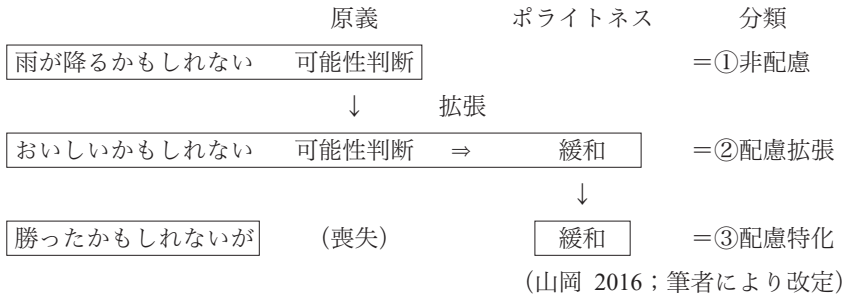
3.2. 対人配慮の意味とポライトネス理論

こういった対人配慮的な表現は日本語学においてもデータが豊富にあるが、山岡（2016）によると理論上の扱いは一定ではなく、1）固定した語彙、語句としてリストアップが可能なものなのか、それとも2）単に機能的現象に過ぎないのかという問題提起がされている。Traugott の間主観性とその意味獲得を実現したものでない限り間主観化とは言えないと主張していることから実質的には1）に該当するであろうことに鑑みて取り上げてみたい。対人配慮的な表現は Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論の観点から議論されることも多い。ポライトネス理論を日本語例を用いてはじめて紹介した生田（1997）によると、「ポライトネスは当事者同士の互いの面子の保持、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケーションを図ろうとする社会的言語行動を指す」という。しかしながら、ポライトネス理論には FTA（Face Threatening Acts フェイス侵害行為：フェイスを保持したいという欲求を脅かす行為）を回避して何も言わないという非言語的の行為も含まれることから、日本語学の間ではその扱いを巡って議論が起こるが、近年では「言葉のポライトネス」という定義を経て「言葉のポライトネスが慣習化したもの＝配慮表現」と規定されることが多く、山岡（2016）は配慮表現を次のように定義する。

- (10) 対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現

この定義で重要なことは、「慣習化の結果として、当該の言語形式がもともと有する本来の語義が希薄となり、最終的には原義を喪失する」ということである。例えば日本語の「かもしれない」という表現については下記のようにまとめている。

- (11) a. 明日は雨が降るかもしれない。〈可能性判断〉
 b. このラーメン、すごくおいしいかもしれない。〈主張〉
 c. 君は試合には勝ったかもしれないが、実力はまだまだだと思ったほうが
 いい。〈忠告〉
- (12) 「かもしれない」の配慮表現の慣習化とポライトネスの関係



(11a) はいわゆる根源的用法で、「かもしれない」の原義とされる。ところが (11b) のように断定回避表現として意見衝突のリスクを低減する目的で使用されることもある。(11c) は、勝ったことは100%事実であるので、緩和機能だけが残って慣習化し、可能性判断の機能は完全に喪失しているという。〈忠告〉という聞き手にとっては FTA となる事柄を行うための緩衝材として、聞き手にとって好ましい材料を一旦は渋々認めている。このような図式は (4) で示した Traugott の意味拡張の方向性とも一致し、(11b)(11c) にいたって徐々に間主観性が強くなっていると考えられる。

3.3. 副詞表現 *peut-être* の場合

本稿では Traugott 的な間主観性の定義と山岡の配慮表現の分析を援用し、フランス語の副詞 *peut-être* を取り上げ、この表現がいかなる点で間主観的であり、またいかなる点で対人配慮（ポライトネス）的であることを明らかにする。

Peut-être は、本来、典型的には (13) のように想定 (*supposition*) や可能性 (*possibilité*) などの蓋然性を表す。また、(14) のように文末におかれた場合は挑発 (*défi*) や皮肉 (*ironie*) を表すことがある。

- (13) Ils ne viendront *peut-être* pas. (Le Robert)

彼らはおそらく来ないだろう。

- (14) Vous n'êtes pas exempt de politesse, *peut-être* ? (Le Petit Robert)

礼儀を欠いてもいいわけではないと思いますが？

(≈ 礼儀作法を免れてはいませんか、おそらく？)

また、法助動詞 *pouvoir* と競合し、譲歩を表すこともある。その場合、後ろに *mais* ではじまる反論の部分を添えた形で現れる。このタイプは正岡の (11c) の例に該当し、*peut-être* の真の命題は事実的な内容である。また、譲歩であることは〈avoir beau + inf.〉の形式でパラフレーズ可能かどうかで確認できる（岸本 2015）。

- (15) L1—Elle est très belle, elle est superbe !

L2—Elle *peut* être belle, mais elle n'est pas très sympathique. (林 1997)

≈ Elle est *peut-être* belle, mais elle n'est pas très sympathique.

≈ Elle *peut bien* être belle, mais elle n'est pas très sympathique.

≈ Elle *a beau* être belle, elle n'est pas très sympathique. (岸本 2015)

- (16) Les camarades, la vie *peut-être* nous en écarte, nous empêche d'y beaucoup penser, mais ils sont quelque part, on ne sait trop où, silencieux et oubliés, mais tellement fidèles !

(Antoine de Saint-Exupéry (1939), *Terre des hommes*, p. 157 : 下線は筆者)

- (17) « ces hommes-là sont heureux, parce qu'ils aiment ce qu'ils font, et ils l'aiment parce que je suis dur. » il faisait *peut-être* souffrir, mais procurait aussi aux hommes de fortes joies.

(Antoine de Saint-Exupéry (1931), *Vol de nuit*, p. 92 : 下線は筆者)

このように観察すると、山岡の配慮の分類に従えば、(13) は単なる可能性判断なのでポライトネス上は非配慮である。(14) は「誰もあなたに礼儀作法を免除したということはない可能性がある」という原義が「なぜ礼儀を欠くのです

か」（〈挑発〉）や「礼儀をわきまえよ」（〈忠告〉）などの聞き手にとっての FTA を緩和する機能として働いているので配慮拡大である。注意すべきは、このレベルにおいて表出しているのは話し手の主観であって、命題そのものは話し手にとっては事実、つまり真偽判断的には真であるということである。(15) においてはもはや *peut-être* のかかる命題「彼女は美しい」は対話者の前言によって明示的に事実化されているので可能性判断の意味は皆無であり、配慮特化のレベルに該当すると考えられる。また、(15) のような *mais* と呼応する形式の *peut-être* の用法は辞書にも記載されていることから意味形式として定着しており、高度に間主観化が起きていると言える。

4. *peut-être* の配慮拡張のグラデーション

ところで、このような *peut-être* の用法にはより細かな段階性が見られるようである。以下ではそれぞれ例を示しながらこのことを確認していく。

4.1. FTA 回避の2つの方向性

まず、比較的容易に分類できる①非配慮と③配慮特化以外の例、つまり②配慮拡張には、A. 話し手の言動が聞き手に受け入れられない可能性を想定し、話し手の発言が FTA になるリスクを回避するものと、B. 話し手の発言が聞き手の消極的フェイスを脅かす場合にそれを回避するものがある。消極的フェイスとは概ね、〈自分の行動を他者から邪魔されたくない、自分の領域を守りたい欲求〉のことである。

4.1.1. 話し手自らの言動が引き起こす FTA 回避型

A については以下のような例が挙げられる。具体的には自分からの申し出について、あるいは自分の行動に対して用いられる *peut-être* が多い。

(18) Il faut que je rentre *peut-être*, maintenant. Voyez comme c'est tard. Il releva sa main, lui fit signe de rester encore. Elle resta.

(Marguerite Duras (1958), *Moderato cantabile*, p. 62)

(19) Je vais *peut-être* aller chercher mon vélo.

(18)は「帰宅したい」のだが、そのことが聞き手の気分を害する、あるいは受け入れられない可能性があると話し手は想定している。この例では実際、帰宅の申し出は聞き手によって拒否されている。このタイプはすでに丁寧語法化しているとも言える。(19)は仲のいい同僚間での発話であり、職場から出て途中まで一緒に帰る場合に出た発話であるが、聞き手がその申し出を拒否する可能性がないと分かっているにもかかわらず使用されている。日本語の程度性を失った「ちょっと」が示す配慮機能に類似している（「ちょっと自転車取りに行ってくるね」）。

(20) Robineau le tira de sa solitude :

– monsieur le directeur, j’ai pensé… on pourrait *peut-être* essayer… il n’avait rien à proposer, mais témoignait de sa bonne volonté.

(Antoine de Saint-Exupéry (1931), *Vol de nuit*, p. 127)

(20)は部下から上司に対しての申し出である。ポライトネス理論において話し手と聞き手の社会的距離や力関係（権力）はFTAの度合いを高める要素になる。職位上、当然のことながら提案は却下される可能性があり、自らの発言がFTAになる可能性を回避するために使用している *peut-être* と捉えられる。

以上はすべて話し手からの申し出に用いられている *peut-être* であるが、命題はすべてこれから起こることである点で共通している。つまり、命題に対する蓋然性と配慮行為が未分化であり、命題についての可能性判断の意味をも備えていることを完全に否定できない点において次のタイプと異なる。

(21)は、自分の行動について用いられている *peut-être* であるが、その場合、話し手はその命題を真、つまり事実であると捉えている。つまり、実際に起こっているあるいは起こった事柄についてなんらかの態度を添えている。

(21) – Je vous trouble *peut-être*, mon cher Aramis, continua d’Artagnan ; car, d’après ce que je vois, je suis porté à croire que vous vous confessez à ces messieurs.

Aramis rougit imperceptiblement.

– Vous, me troubler ? Oh ! bien au contraire, cher ami, je vous le jure [...]

(Alexandre Dumas (1844), *Les Trois mousquetaires*, p. 291)

他に二人の先客（聖職者）がいた友人の部屋に入った主人公は、懺悔の邪魔になっていると思い発した台詞である。car以降で実際に自分が彼の邪魔になっている理由を述べている。

次の例は、自分の（ここでは小さな）発見を提示しているのであるが、そのことが誇示にならないよう聞き手に配慮している。

(22) Et, pour ne te donner qu'un exemple, j'ai *peut-être* enfin trouvé un sens à ces cauchemars qui me hantent. La voyante de Brighton avait raison, tout du moins sur un point. Mon enfance était là, au premier étage d'un immeuble d'Istanbul.

(Marc Lévy (2011), *L'étrange voyage de Monsieur Daldry*, p. 303)

「悪夢に意味を見出した」ことが話し手にとって事実である根拠は、次に続く「占い師の言ったことが正しかったのだ」という説明によって示されている。

4.1.2. 聞き手の消極的フェイスへの FTA 回避型

次に B. 話し手の発言が聞き手の消極的フェイスを脅かす場合にそれを回避するものについて観察する。このタイプにおいては、相手の行動について言及するものが見られる。

次の例においては、バーで主人公の女性 Paule とその男友達 Roger が囲んでいるテーブルに Simon という別の男性が割り込んでくる場面である。気分を害された Roger が「他にもテーブルはある」と別のテーブルに移るよう勧めるところで *peut-être* が使用されている。

(23) – Je vous cherchais partout, reprit Simon. Je finissais par me demander si je vous avais rêvée.

Ses yeux brillèrent, il avait posé la main sur le bras de Paule stupéfaite.

– Vous avez *peut-être* une autre table ? dit Roger.

(Françoise Sagan (1959), *Aimez-vous Brahms*, p. 28)

このように聞き手に対する要求場面においては、相手の消極的フェイスを侵害しないように *peut-être* を用いている。

また、次の例は、主人公が一人で飲むのは嫌だからと店の亭主に乾杯を誘う場面であるが、喜んだ亭主に、「この乾杯にはあなたが考えるよりもっと利己的な理由があるのだ」と言い伝えるところで *peut-être* が使用されている。

(24) – Votre Seigneurie me fait honneur, dit l’hôte, et je la remercie bien sincèrement de son bon souhait.

– Mais ne vous y trompez pas, dit d’Artagnan, il y a plus d’egoïsme *peut-être* que vous ne le pensez dans mon toast [...].

(Alexandre Dumas (1844), *Les Trois mousquetaires*, p. 290)

その利己的な理由というのが聞き手の消極的フェイスの侵害にならぬようにと用いられた *peut-être* である。

(25) – J’irai trouver ce soir même M. de Tréville, que je chargerai de demander pour moi cette faveur à son beau-frère, M. des Essarts.

– Maintenant, autre chose.

– Quoi ? demanda d’Artagnan, voyant que Mme Bonacieux hésitait à continuer.

– Vous n’avez *peut-être* pas d’argent ?

– *Peut-être* est de trop, dit d’Artagnan en souriant.

(Alexandre Dumas (1844), *Les Trois mousquetaires*, p. 218)

この最後の例では、主人公が若くお上りさんでお金がないことを知っている恋人が、まさにお金を持たずに極秘任務に出かけようとする主人公を心配する場

面である。このような場合も主人公の消極的フェイスを（大いに）侵害する可能性があり、それを回避するために *peut-être* を使用している。興味深いのは、主人公によって「*peut-être* は余計ですよ」との切り返しがあることで、お金がないのは事実であることを認めている（実際、この女性から資金を受け取る）。これらのやり取りから、*peut-être* は真理条件的には真である事実を、敢えて蓋然性の領域に取り込むことで真性を曖昧にしており、そのことがポライトネス的な配慮行動の動機づけになっていると思われる。

その意味では、以上の (23)(24)(25) はすべて事実性に対する使用であり、相手の領域に踏み込みそうになったときに使用される配慮行動としての *peut-être* とまとめることができる。

4.2. 認め方の問題としての *peut-être*（断定緩和、譲歩）

一方で、*peut-être* をポライトネス理論的な配慮行為の範疇として論じた場合、問題が一つ浮上する。それは、次のような例の場合、②や③のような聞き手に対する配慮は感じられないにもかかわらず、①非配慮のレベルが示す可能性判断とも解釈できないからである。

(26) [...] je ne sais pas voir les moutons à travers les caisses. Je suis *peut-être* un peu comme les grandes personnes. J'ai dû vieillir.

(Antoine de Saint-Exupéry (1943), *Le Petit prince*, p. 423)

『星の王子さま』で主人公は子どもの頃に自分の意図が伝わらなかった大人に落胆し、大人を想像力のない残念な人種として捉えるが、星の王子さまに会い、今度は自分が王子さまの要求に答えられないことに気づく。自分が「大人」のようになってしまったことを認めざるを得ない場面で使用されている *peut-être* である。ここで可能性判断の解釈をすることは基本的には難しい。なぜなら直前で、自分が、かつての自分を落胆させた大人たちのようにしていることを認めているからである。

- (27) Sam avait *peut-être* raison, la perspective de cette expérience la dérangeait plus qu'elle ne l'avait supposé.

(Marc Lévy (2011), *L'étrange voyage de Monsieur Daldry*, p. 31)

同様の例は (27) のような他者の正当性を認めるような場面でも多く使用される。このようなタイプに聞き手の消極的フェイスの侵害の可能性などを認めることはできず、これらが単にある事態が事実であることを渋々認める（是認）という認め方の問題に帰結すると思われ、これは一種の譲歩である。このタイプにおいてもやはり、*peut-être* は真理条件的には真である事実を敢えて蓋然性の領域に取り込み、真性を曖昧にしている。4.1. で分析した例との違いは、そのことが聞き手に向けた配慮行為に向くのではなく、事態の提示の仕方の方策に留まっている点である。

しかし、これらの例が同じく事態の認め方に関わる〈*peut-être* – *mais*〉の呼応表現と類似していることから、単に *mais* 以降で主張される内容がないがために相手への配慮行為が感じられないだけのことである。Brown & Levinson の「すべての行為が FTA となり得る」という考えに従うと、当該の事態を真正面から認めることで自己の消極的フェイスが侵害される可能性があるため、それを回避するための自己防衛の手段と言える。

4.3. 返答としての *peut-être*

次に、返答として用いられる *peut-être* について検討する。Oui と答える代わりに用いられるのが特徴であるが、(28) のように上述した譲歩の一種としての〈是認〉としての意味効果をもつものが多い。「あなたの言っていることは何の意味も無い」という Alice に、後続する文で「自分は縁日の占い師でしかない」と自分の立場を認めているからである。

- (28) – Ce que vous me racontez n'a aucun sens, protesta Alice.

– *Peut-être*. Après tout, je ne suis qu'une simple voyante de fête foraine.

(Marc Lévy (2011), *L'étrange voyage de Monsieur Daldry*, p. 62)

(29) – Morbleu, Monsieur ! dit-il, de si loin que je vienne, ce n'est pas vous qui me donnerez une leçon de belles manières, je vous prévienne.

– *Peut-être*, dit Athos. (Alexandre Dumas (1844), *Les Trois mousquetaires*, p. 59)

(29) は「あなたから礼儀作法を教わるつもりはない」と怒る田舎から出てきたばかりの主人公 D'Artagnan にパリの大貴族の風貌を持つ高雅な Athos が答える場面であるが、実際には自分の方が貴族社会の礼儀作法には詳しいことは明らかであるので、対話者の主張に譲歩しながらもやや皮肉めいた意味効果をもたらす。この皮肉のような意味効果は対話者間の社会的関係に起因していると思われる。例えば、この二人のセリフを入れ替えて、*peut-être* が D'Artagnan の返答だとした場合、その意味は (28) と同等、つまり単なる〈是認〉にしかないだろう。

4.4. 過剰さを打ち消す *peut-être*

最後に、*trop* と共起する *peut-être* について検討する。(30)(31) のように、程度が過剰であることを表す副詞 *trop* の前後に *peut-être* が用いられることは多い。

(30) – Vous allez arriver plus tard que d'habitude dans cette maison, vous y arriverez plus tard, *peut-être trop* tard, c'est inévitable. Faites-vous à cette idée.

(Marguerite Duras (1958), *Moderato cantabile*, p. 114 : 下線は筆者)

(31) – Ma foi, [...] je ne l'ai pas fait exprès, j'ai dit : « Excusez-moi ». Il me semble donc que c'est assez. Je vous répète cependant, et cette fois c'est *trop peut-être*, parole d'honneur ! je suis pressé, très pressé.

(Alexandre Dumas (1844), *Les Trois mousquetaires*, p. 58 : 下線は筆者)

(30) は相手が予想以外に遅く到着することを〈非難〉しているため、対話者の消極的フェイスを侵害する可能性があるので、それを回避するために *peut-être* が用いられる。(31) は何度も謝罪することが相手にとって心理的に負担になる可能性があるため、摩擦を避けるために *peut-être* が用いられていると考えら

れる。それぞれ過剰であることを断定することもできるが、程度が過剰なことについて言及する場合、聞き手にとって何らかの好ましくない影響が及ぶ可能性があるので、それを緩和するために敢えて蓋然性の領域に取り込み、真性を曖昧にしている。その意味でポライトネス的な方策であると言える。

5. おわりに

本稿では、Traugott 流の間主観性の概念を発展的に捉え、フランス語の副詞 *peut-être* の原義以外の振る舞いについて考察した。その際、対人配慮の観点からポライトネス理論の考え方を援用し、副詞 *peut-être* を① FTA 回避のための *peut-être*、② 認め方の問題としての *peut-être*、③ 返答としての *peut-être*、④ 過剰さを打ち消す *peut-être*、の 4 つに分類し、それぞれにおいて話し手と対話者との関係の取り結びと、話し手と事実性との対峙のあり方について分析した。

これまでのところ *peut-être* についての先行文献が多くないことから、本稿では用例の検討が中心となったが、今後は似たような振る舞いをする法助動詞 *pouvoir* や、筆者がこれまで研究対象としてきた法助動詞 *devoir*、接続詞 *si* などとともにより統合的な視座からモダリティ表現と事実性の問題について論じることを課題としたい。

* 本論文は、令和元年度愛知県立大学学長特別教員研究費の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- 1) Benveniste の間主観性についての言及は、その前提として *subjectivité*（主体性、訳：岸本 2015 [1983]）の規定から始まる。主体性は「話し手みずからを《主体》として設定する能力のことである。それは、[…] その身に集まる体験された経験の総体を超越して、意識の恒久性を保証する心的統一として定義される」のであるが、たとえば、1 人称主語は対話の場において聞き手が存在してはじめて決まり、その性質は相補的であり、かつ反転可能である。このことを Benveniste は「語用体 *pragmatique* 上の一つの帰結」と位置づけていることから、彼の考える主体性というのが現場主義的なものであることがわかる。さらにこの主体性について「……《我》と《他者》、

個人と社会という旧来の二律背反は崩壊する。[…] この二つの項を包括し、これを相互関係から定義する弁証法的現実においてはじめて、主体性の言語的根拠が見いだされるのである」とし、主に人称詞の存在および言語的地位とその特異な運用の痕跡に主体性の根拠を求めている。たとえば、*je sens (que le temps va changer)* と、*je crois (que le temps va changer)* を比較した場合、前者は「現在のわたしの状態を描写」しているのに対し、後者は「緩和された断定」に等しく、真の命題である *le temps va changer* を主観的 *subjectif* 言表行為に切り替えているのであって、思考操作を言表の対象としているのではないと分析している。したがって、Benveniste の間主観性はまず発話現場に依存する人称性にまつわる主体性の概念から出発しており、コミュニケーション重視の観点を採用していると言える。

- 2) Traugott による間主観性についてのこの説明は、Lyons (1982) による主観性の定義を敷衍したものである。

参考文献

- Benveniste, E (1966), “De la subjectivité dans le langage”, *Problèmes de linguistique générale 1*, Domont, Gallimard, pp. 258–266. (バンヴェニスト, エミール; 岸本通夫他訳 (1983) 『一般言語学の諸問題』みすず書房.)
- Bréal, M. (1964 [1900]), *Semantics: Studies in the Science of Meaning*, Trans. by Mrs. Henry Cust, New York, Dover.
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987), *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 深田智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ—』研究社.
- Haiman (1989), “Alienation in Grammar”, *Studies in Linguistics* 13–1.
- 早瀬尚子 (2018) 「最新の意味論研究の進展」早瀬尚子編 『言語研究と言語学の進展シリーズ第2巻 言語の認知とコミュニケーション—意味論・語用論, 認知言語学, 社会言語学—』開拓社, pp. 2–66.
- 林迪義 (1997) 「譲歩を表す *pouvoir* について」『フランス語学研究』31, 日本フランス語学会, pp. 58–59.
- 池上嘉彦 (2020) 「事態把握」池上嘉彦・山梨正明編 『講座 言語研究の革新と継承 5 認知言語学Ⅱ』ひつじ書房, pp. 1–22.
- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『言語』26–6, 大修館書店, pp. 66–71.
- 岸本聖子 (2015) 「法助動詞 *devoir* と *pouvoir* の陳述に関わる意味効果: 語用論的観点からの分析」『フランス語学研究』49, 日本フランス語学会, pp. 43–64.

- 岸本聖子 (2017) 「モダリティ表現における語用論的機能—devoir, pouvoir, si の例を中心に—」『フランス語フランス文学研究』111, 日本フランス語フランス文学会, pp. 129–144.
- 岸本聖子 (2018) 『モダリティ表現にまつわる事実性の意味論—DEVOIR, POUVOIR, SI の意味効果をめぐって—』弘学社, (2016年度大阪大学提出博士論文)
- 黒滝真理子 (2020) 「事態把握とモダリティ」池上嘉彦・山梨正明編『講座 言語研究の革新と継承 4 認知言語学 I』ひつじ書房, pp. 331–355.
- 澤田治美編 (2011) 『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』ひつじ書房.
- Langacker, R. W. (1987), *Foundations of cognitive grammar: Theoretical prerequisites (Vol. 1)*, California, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1999), *Grammar and conceptualization*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1991), *Concept, image, and symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- Lyons, J. (1982), “Deixis and subjectivity: Loquor, ergo sum?” in Jarvella, R. J. & W. Klein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies of Deixis and Related Topics*, New York, John Wiley & Sons, pp. 101–124.
- 中村芳久 (2019) 『認知文法研究—主観性の言語学—』くろしお出版.
- 中村芳久・上原聡編 (2016) 『ラネカーの（間）主観性とその展開』開拓社.
- 進藤三佳 (2020) 「主観化」池上嘉彦・山梨正明編『講座 言語研究の革新と継承 5 認知言語学 II』ひつじ書房, pp. 73–86.
- Tomasello, M. (2003), *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*, Cambridge, Harvard University Press. (トマセロ, マイケル; 辻幸夫他訳 (2008) 『ことばをつくる—言語習得の認知言語学的アプローチ—』慶應義塾大学出版会.)
- Traugott, E. C. (2003), “From Subjectification to Intersubjectification”, in Hickey, R. (ed.) *Motives for Language Change*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 124–139.
- Traugott, E. C. (2010), “(Inter) subjectivity and (inter) subjectification: a reassessment”, in Davidse, K., Vandelandotte, L. & H. Cuyckens (eds.) *Subjectification, intersubjectification and grammaticalization*, Berlin, Mouton de Gruyter, pp. 29–71.
- Traugott E. C. & E. König (1991), “The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited”, in Traugott E. C. & B. Heine (eds.) *Approaches to grammaticalization*, 1, Amsterdam, John Benjamins, pp. 189–218.
- Traugott E. C. & R. B. Dasher (2002), *Regularity in semantic change*, Cambridge, Cambridge University Press.

Verhagen (2005), *Constructions of intersubjectivity: Discourse, syntax, and cognition*, Oxford, Oxford University Press.

Wierzbicka, A. (2006), *English—Meaning and Culture*, New York, Oxford University Press.

山岡政紀（2016）「配慮表現の習慣化と原義の喪失をめぐる一考察」『日本語コミュニケーション研究論集』5，日本語コミュニケーション研究会，pp. 1–9.

山岡政紀（2016）「カモシレナイ」における可能性判断と対人配慮」小野正樹・李奇楠編『言語の主観性 認知とポライトネスの接点』くろしお出版，pp. 133–150.

辞書

Le Petit Robert de la langue française, Dictionnaires Le Petit Robert/Sejer.

Trésor de la Langue Française informatisé (<http://www.atilf.fr/tlfi>), ATILF – CNRS & Université de Lorraine.

コーパス

Frantext (Version septembre 2019.3, <http://www.frantext.fr>), ATILF-CNRS & Université de Lorraine.